

〔原著〕 松本歯学 11：22～28, 1985

Key words: 齒頸部ほうろう (エナメル) 突起 — 上顎大白歯 — 上顎骨齒槽突起

## 上顎大白歯の齒頸部ほうろう (エナメル) 突起

峯村隆一, 都筑文男

松本歯科大学 口腔解剖学第1講座 (指導 恩田千爾 教授)

### Cervical Enamel Projection on the Maxillary Molars

RYUICHI MINEMURA and FUMIO TSUZUKU

*Department of Oral Anatomy, Matsumoto Dental College*

*(Director : Prof. S. Onda)*

#### Summary

In the observation of frequency, location, and extention of cervical enamel projection on the maxillary molar teeth of Indian skulls, and in the measure of the distance between cervical line and alveolar crest of the maxillary molars, the following results were obtained.

##### 1. Frequency and degree

The cervical enamel projection on the buccal surface of first molars were most frequently 0 degree in 47.1 %, followed by I degree in 44.2 %, III degree in 3.4 % and II degree in 2.5 %

The cervical enamel projection of second molars were most frequently 0 degree in 40 %, followed by I degree in 29 %, III degree 23 % and II degree 8 %. They were most frequently found in the maxillary molar teeth.

The cervical enamel projection of third molars were most frequently 0 degree in 58 %, followed by I degree in 28 %, III degree in 10 % and II degree in 3 %.

##### 2. Resorption of alveolar crest

The average distance between the buccal cervical line and the alveolar crest of the maxillary first molars were 0 degree in 2.87 mm, I degree in 3.63 mm, II degree in 5.83 mm and III degree in 4.27 mm.

The average distance of the buccal side on the maxillary second molars were 0 degree in 2.36 mm, I degree in 2.90 mm, II degree in 3.34 mm and III degree in 3.05 mm.

The average distance of the buccal side on the maxillary third molars were 0 degree 2.00 mm, I degree 2.52 mm, II degree 2.50 mm and III degree 2.83 mm.

## 緒 言

大臼歯の歯頸部ほうろう突起は Pedersen<sup>11)</sup> (1949) によって Eskimo に多いと報告され、また Masters と Hoskins<sup>7)</sup> (1964) によって、90% 以上で盲嚢を形成し、歯周疾患の原因になると報告されて以来、数多くの調査がなされている。

我が国でも、村上他<sup>9)</sup>、阿部<sup>1)</sup>、岩野<sup>2)</sup>、川崎他<sup>6)</sup>、加治<sup>3)</sup>、松江他<sup>8)</sup>、恩田他<sup>10)</sup>や川崎他<sup>5)</sup>の研究がある。

しかし、上顎歯頸部ほうろう突起の発育度と、歯槽突起の吸収との関係や、他人種との比較で不明瞭な点があるので、次のことを行なった。

歯頸部ほうろう突起を4段階に分類して他人種と比較した。すなわち2度、3度に比べて1度は観察者によって誤差を生じやすいのではないかと考えたからである。また、歯槽突起の吸収は歯頸線と歯槽縁間の距離を計測し、吸収の程度を正確に示した。

## 材料と方法

材料は松本歯科大学解剖学教室所蔵のインド人 (Hindoo) 頭蓋骨121例に植立した上顎大臼歯で第1、第2、第3大臼歯と連続して観察出来るよう、欠損歯のないものを用いた。

方法は歯頸部ほうろう突起の発育度による出現率と歯根の露出度を計測して、その相関関係を調べた。

歯頸部ほうろう突起の発育度は Masters, et al. の分類を主とし、鈴木や村上他らの考えを参考にして次の様に分けた。0度=突起のみられないもの。I度=突起が根幹の $\frac{1}{2}$ をこえないもの。II度=突起が根幹 $\frac{1}{2}$ 以上で分岐部に達しないもの。III度=突起が分岐部までのびているもの。Ii度=I度の先にほうろう島のあるもの、とした(図1, 2, 3)。また、歯周疾患による歯槽突起の吸収状態を知るために、歯頸線と歯槽縁間の距離を計測した。歯槽縁は様々な形に吸収するが、各々の歯根の最も多く露出した部位の距離である。計測には1/20 mm まで計測可能なノギスを用いた。

## 成 績

### 1. 出現状態

顎骨に植立した上顎大臼歯の隣接面は観察しに

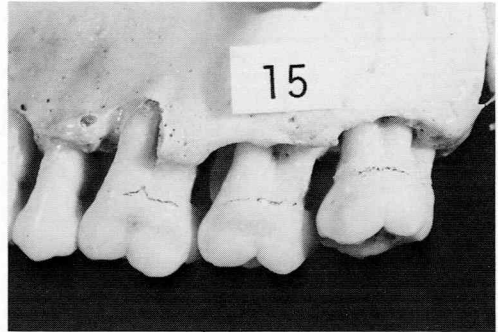


図1：歯頸部ほうろう突起の分類(1)

第1大臼歯=I度  
第2大臼歯=0度  
第3大臼歯=0度

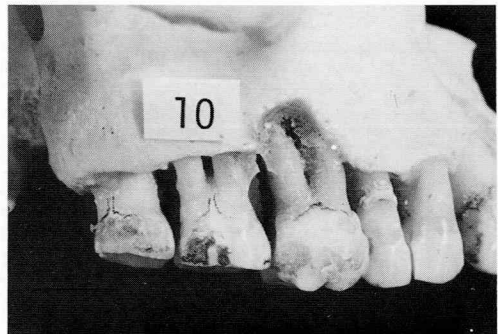


図2：歯頸部ほうろう突起の分類(2)

第1大臼歯=II度  
第2大臼歯=III度  
第3大臼歯=III度

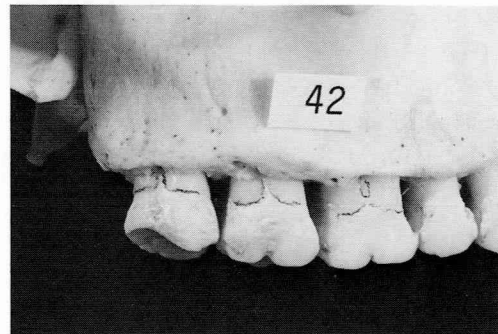


図3：歯頸部ほうろう突起の分類(3)

第1大臼歯=Ii度  
第2大臼歯=III度  
第3大臼歯=III度

くく、舌面には歯頸部ほうろう突起は見られないので頬面のみを観察した。

第1大臼歯：出現率は52.9%である。そのうち、

表 1：歯頸部ほうろう突起の出現状態（上顎大白歯頰面）

型	右 側			左 側			合 計		
	6	7	8	6	7	8	6	7	8
0	61(50.41)	49(40.50)	49(57.65)	53(43.80)	48(39.67)	51(58.62)	114(47.11)	97(40.08)	100(58.14)
I	48(39.67)	38(31.40)	24(28.24)	59(48.76)	32(26.45)	24(19.83)	107(44.21)	70(28.93)	48(27.91)
II	3( 2.48)	10( 8.26)	3( 3.53)	3( 2.48)	9( 7.44)	3( 3.45)	6( 2.48)	19( 7.85)	6( 3.49)
III	8( 6.61)	24(19.83)	9(10.59)	5( 4.13)	31(25.62)	9(10.34)	13( 5.37)	55(22.73)	18(10.47)
Ii	1( 0.83)			1( 0.83)	1( 0.83)		2( 0.83)	1( 0.41)	
計	121	121	85	121	121	87	242	242	172

表 2-1：歯頸線と歯槽縁間の距離（上顎第 1 大白歯頰側）

側 別	型	0.50	1.50	2.50	3.50	4.50	5.50	6.50	7.50	8.50	9.50	10.50	11.50	N	$\bar{x}$	$\sigma_{n-1}$
		n( % )	n( % )	n( % )	n( % )	n( % )	n( % )	n( % )	n( % )	n( % )	n( % )	n( % )	n( % )			
右 側	0	1(1.64)	15(24.57)	19(31.15)	14(22.95)	8(13.11)	3( 4.92)		1( 1.64)					61	2.94	1.32
	I		5(10.42)	18(37.50)	12(25.00)	3( 6.25)	6(12.50)	2( 4.17)	1( 2.08)				1(2.08)	48	3.60	1.86
	II			1(33.33)			1(33.33)				1(33.33)			3	5.83	3.51
	III			1(12.50)	3(37.50)	2(25.00)		1(12.50)	1(12.50)					8	4.50	1.69
	Ii			1(100.0)										1	3.50	—
左 側	0	1(1.89)	14(26.42)	23(43.40)	8(15.09)	3( 5.66)	2( 3.77)	1( 1.89)			1( 1.89)			53	2.78	1.50
	I		8(13.56)	16(27.12)	17(28.81)	8(13.56)	5( 8.47)	1( 1.69)	2( 3.39)	1( 1.69)		1(1.69)		59	4.31	1.42
	II				1(33.33)		1(33.33)			1(33.33)				3	5.83	2.52
	III			1(20.00)	1(20.00)	3(60.00)								5	3.90	0.89
	Ii			1(100.0)										1	2.40	—
合 計	0	2(1.75)	29(25.44)	42(36.84)	22(19.30)	11( 9.65)	5( 4.39)	1( 0.88)	1( 0.88)		1( 0.88)			114	2.87	1.40
	I		13(12.15)	34(31.78)	29(27.10)	11(10.28)	11(10.28)	3( 2.80)	3( 2.80)	1( 0.93)		1(0.93)	1(0.93)	107	3.63	1.82
	II			1(16.67)	1(16.67)		2(33.33)			1(16.67)				6	5.83	2.73
	III			2(15.38)	4(30.77)	5(38.46)		1( 7.69)	1( 7.69)					13	4.27	1.42
	Ii			1(50.00)	1(50.00)									2	3.00	0.71

I 度が44.2%で最も多く、次いでIII度が5.4%、II 度が2.5%である。

第 2 大白歯：出現率は59.9%である。そのうち、I 度が28.9%で最も多く、次いでIII度が22.7%、II 度が7.9%である。すなわち、上顎大白歯中最も高率にみられ、また発育も良好である。

第 3 大白歯：出現率は41.9%である。そのうち、I 度が27.9%で最も多く、次いでIII度が10.5%、II 度が3.5%である。すなわち、出現率では上顎大白歯の 3 歯中最も少ないがII 度とIII 度の出現率は第 1 大白歯より多い（表 1）。

## 2. 歯頸線と歯槽縁間の距離

第 1 大白歯：歯頸線と歯槽縁間の距離は上顎大白歯中最も大きい。

0 度の場合は0.5 mm から9.5 mm までみられる。2.5 mm が36.8%で最も多く、次いで1.5 mm が25.4%、3.5 mm が19.3%、4.5 mm が9.7%で、平均2.9 mm である。I 度は1.5 mm から11.5 mm までみられ、2.5 mm が31.8%で最も多く、次いで3.5 mm が27.1%、1.5 mm が12.2%、4.5 mm と5.5 mm が各々10.3%で、平均3.6 mm である。II

度は2.5 mm から9.5 mm までみられ5.5 mm が33.3%で最も多く、次いで2.5 mm、3.5 mm、8.5 mm と9.5 mm が各々 1 例（16.7%）ずつみられ、平均5.8 mm である。III 度は2.5 mm から7.5 mm までみられる。4.5 mm が38.5%で最も多く、次いで3.5 mm が30.8%、2.5 mm が15.4%で、平均4.3 mm である。

すなわち、0 度、I 度、II 度と歯頸部ほうろう突起の発育が良くなるに従って歯頸線と歯槽縁間の距離が増大し、III 度はII 度よりやや減少している（表 2-1）。

第 2 大白歯：0 度では0.5 mm から5.5 mm までみられる。1.5 mm が34.0%で最も多く、次いで2.5 mm が27.8%、3.5 mm が14.4%、0.5 mm が11.3%で、平均2.4 mm である。I 度は、1.5 mm から7.5 mm までみられ、2.5 mm が34.3%で最も多く、次いで1.5 mm が27.1%、3.5 mm が21.4%、4.5 mm が10.0%で、平均2.9 mm である。II 度は1.5 mm から6.5 mm までみられ、3.5 mm が31.6%で最も多く、次いで2.5 mm が26.3%、1.5 mm と4.5 mm が各々15.8%で、平均3.3 mm であ

表 2-2: 歯頸線と歯槽縁間の距離 (上顎第 2 大臼歯頰側)

側別	型	0.50	1.50	2.50	3.50	4.50	5.50	6.50	7.50	N	$\bar{x}$	$\sigma_{n-1}$
		n( % )	n( % )	n( % )	n( % )	n( % )	n( % )	n( % )	n( % )			
右側	0	7(14.29)	13(26.53)	14(28.57)	7(14.29)	6(12.24)	2( 4.08)			49	2.46	1.37
	I		12(31.58)	12(31.58)	10(26.32)	2( 5.26)		1( 2.63)	1( 2.63)	38	2.79	1.35
	II		1(10.00)	1(10.00)	4(40.00)	3(30.00)		1(10.00)		10	3.80	1.34
	III		1( 4.17)	10(41.67)	11(45.83)		1( 4.17)	1( 4.17)		24	3.21	1.04
	Ii											
左側	0	4( 8.33)	20(41.67)	13(27.08)	7(14.58)	3( 6.25)	1( 2.08)			48	2.25	1.14
	I		7(14.58)	12(37.50)	5(15.63)	5(15.63)	3( 9.38)			32	3.03	1.27
	II		2(22.22)	4(44.44)	2(22.22)		1(11.11)			9	2.83	1.22
	III		5(16.13)	14(45.16)	7(22.58)	4(12.90)	1( 3.23)			31	2.92	1.03
	Ii					1(100.0)				1	4.50	—
合計	0	11(11.34)	33(34.02)	27(27.84)	14(14.43)	9( 9.28)	3( 3.09)			97	2.36	1.26
	I		19(27.14)	24(34.29)	15(21.43)	7(10.00)	3( 4.29)	1( 1.43)	1( 1.43)	70	2.90	1.31
	II		3(15.79)	5(26.32)	6(31.58)	3(15.79)	1( 5.26)	1( 5.26)		19	3.34	1.34
	III		6(10.91)	24(43.64)	18(32.73)	4( 7.27)	2( 3.64)	1( 1.82)		55	3.05	1.03
	Ii					1(100.0)				1	4.50	—

表 2-3: 歯頸線と歯槽縁間の距離 (上顎第 3 大臼歯頰側)

側別	型	0.50	1.50	2.50	3.50	4.50	5.50	7.50	N	$\bar{x}$	$\sigma_{n-1}$
		n( % )	n( % )	n( % )	n( % )	n( % )	n( % )	n( % )			
右側	0	13(26.53)	12(24.49)	15(30.61)	6(12.24)	3( 6.12)			49	1.97	1.19
	I		8(33.33)	9(37.50)	3(12.50)	3(12.50)	1( 4.17)		24	2.67	1.17
	II		2(66.67)	1(33.33)					3	1.83	0.58
	III		1(11.11)	4(44.44)	2(22.22)	2(22.22)			9	3.06	1.04
	Ii										
左側	0	10(19.61)	19(37.25)	13(25.49)	6(11.76)	2( 3.92)		1( 1.96)	51	2.03	1.32
	I	1( 4.17)	10(41.67)	5(20.83)	7(29.17)	1( 4.17)			24	2.38	1.03
	II		1(33.33)		1(33.33)	1(33.33)			3	3.17	1.53
	III		3(33.33)	2(22.22)	4(44.44)				9	2.61	0.93
	Ii										
合計	0	23(23.00)	31(31.00)	28(28.00)	12(12.00)	5( 5.00)		1( 1.00)	100	2.00	1.25
	I	1( 2.08)	18(37.50)	14(29.17)	10(20.83)	4( 8.33)	1( 2.08)		48	2.52	1.10
	II		3(50.00)	1(16.67)	1(16.67)				6	2.50	1.26
	III		4(22.22)	6(33.33)	6(33.33)	2(11.11)			18	2.83	0.97
	Ii										

る。III度はII度と同様1.5 mm から6.5 mm までみられ、2.5 mm が43.6 mm で最も多く、次いで3.5 mm が32.7%、1.5 mm が10.9%で、平均3.7 mm である。

すなわち、歯頸線、歯槽縁間距離は第 1 大臼歯同様 0 度、I 度、II 度と歯頸部はうろろ突起が増大するに従って増大するが、III 度ではII 度よりやや少ない値を示した (表 2-2)。

第 3 大臼歯: 歯頸線と歯槽縁間距離は上顎大臼歯中最も小さい。0 度は 0.5 mm から 7.5 mm までみられ、1.5 mm が最も多く 31.0%、次いで 2.5 mm が 28.0%、0.5 mm が 23.0%、3.5 mm が

12.0%で、平均 2.0 mm と非常に小さい。I 度は 0.5 mm から 5.5 mm までみられ、1.5 mm が 37.5%で最も多く、次いで 2.5 mm が 29.2%、3.5 mm が 20.8%で平均 2.5 mm である。II 度は 1.5 mm が 50.0%、2.5 mm と 3.5 mm が 16.7%みられ、平均 2.5 mm である。III 度は 1.5 mm から 4.5 mm までみられ、2.5 mm と 3.5 mm が 33.3%ずつで最も多く、平均 2.8 mm である。

すなわち、平均値は I 度と II 度であまり差がないが、歯頸部はうろろ突起の増大とともに、歯頸線と歯槽縁間距離は次第に大きくなる様である (表 2-3、図 4、5、6)。

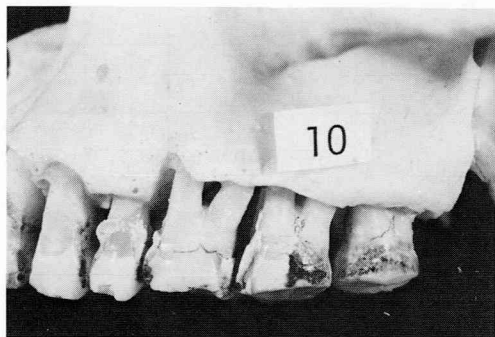


図4：歯槽突起の吸収の強い例(1)  
歯頸線と歯槽縁間距離は  
 $M_1=8.2\text{ mm}$ ,  $M_2=5.0\text{ mm}$ ,  $M_3=3.8\text{ mm}$

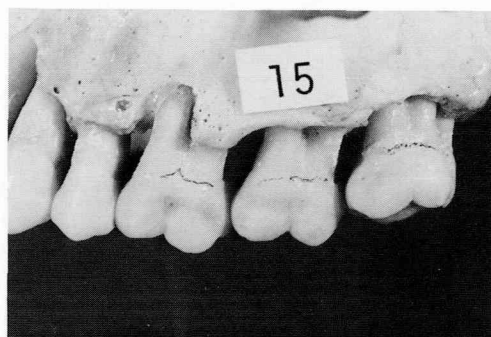


図5：歯槽突起の吸収の強い例(2)  
歯頸線と歯槽縁間距離は  
 $M_1=8.1\text{ mm}$ ,  $M_2=5.5\text{ mm}$ ,  $M_3=4.3\text{ mm}$



図6：歯槽突起の吸収の中等度例  
歯頸線と歯槽縁間距離は  
 $M_1=4.3\text{ mm}$ ,  $M_2=4.0\text{ mm}$ ,  $M_3=3.5\text{ mm}$



図7：歯槽突起の吸収の弱い例  
歯頸線と歯槽縁間距離は  
 $M_1=2.3\text{ mm}$ ,  $M_2=1.5\text{ mm}$ ,  $M_3=3.6\text{ mm}$

## 考 察

### 1. 他人種との比較

第1大臼歯：I度の出現率はインド人44.2%で、日本人を調べた、岩野他の46.5%や加治の43.7%に近い値であり、川崎他の抜去歯11.4%、頭蓋骨9.5%、米国人3.2%やギリシャ人14.4%より多い。しかし、II度はインド人2.5%で、米国人の1.1%やギリシャ人の2.3%に近く、日本人の23.3%~31.1%に比べて非常に少ない。III度もII度と同様であり、インド人5.4%、ギリシャ人の3.1%が最も近い値であり、日本人の9.6%~25.7%より少なく、米国人の2.0%より多い(表3-1)。

第2大臼歯：I度の出現率はインド人で28.9%であり、日本人を調査した岩野他49.0%や加治40.0%より少なく、川崎他の抜去歯11.9%、頭蓋骨22.5%よりやや多く、米国人の5.5%やギリシャ

人2.4%に近く、日本人25.0%~40.9%より少ない。II度はインド人で22.7%で加治や川崎他の20.1%~25.4%に近い値であり、岩野他8.3%、米国人10.8%、ギリシャ人0.8%より多い(表3-2)。

第3大臼歯：I度はインド人で27.9%であり、米国人の4.5%より非常に多い。II度はインド人3.5%、米国人3.4%でほぼ同様の値である。III度はインド人10.5%で米国人の4.3%より多い(表3-3)。

### 2. 歯槽縁の吸収

歯頸線と歯槽縁間距離の0度の場合の平均は第1大臼歯2.9 mm, 第2大臼歯2.4 mm, 第3大臼歯2.0 mmで0.4 mm~0.5 mm ずつ後方へと減少している。

また、歯頸部ほうろう突起との関係は第1, 第2大臼歯ではI度, II度と歯頸線と歯槽縁間の距離は増大するがIII度でやや減少している。0度と

表3-1: 歯頸部ほうろう突起の他人種との比較(上顎第1大臼歯頰面)

報告者	人種	材料	0	I	II	III	Ii	計
			n (%)	n (%)	n (%)	n (%)	n (%)	
恩田, 峯村	インド人	頭蓋骨	114(47.11)	107(44.21)	6(2.48)	13(5.37)	2(0.83)	242
加治	日本人	抜去歯	44(22.34)	86(43.65)	47(23.86)	19(9.64)	1(0.51)	197
川崎他	日本人	抜去歯	86(48.86)	20(11.36)	41(23.30)	26(14.77)	2(1.14)	176
		頭蓋骨	22(29.73)	7(9.46)	23(31.08)	19(25.68)	3(4.05)	74
岩野他	日本人	生体	16(15.84)	47(46.53)	28(27.72)	10(9.90)	—	101
Grewe, et al.	米国人	抜去歯	588(93.93)	20(3.19)	7(1.12)	11(1.96)	—	626
Tastsas, et al.	ギリシャ人	抜去歯	206(80.16)	37(14.40)	6(2.33)	8(3.11)	—	257

表3-2: 歯頸部ほうろう突起の他人種との比較(上顎第2大臼歯頰面)

報告者	人種	材料	0	I	II	III	Ii	計
			n (%)	n (%)	n (%)	n (%)	n (%)	
恩田, 峯村	インド人	頭蓋骨	97(40.08)	70(28.93)	19(7.85)	55(22.73)	1(0.41)	242
加治	日本人	抜去歯	7(6.36)	44(40.00)	34(30.91)	23(20.91)	2(1.82)	110
川崎他	日本人	抜去歯	31(28.44)	13(11.93)	36(33.03)	25(22.94)	4(3.67)	109
		頭蓋骨	6(8.45)	16(22.54)	29(40.85)	18(25.35)	2(2.82)	71
岩野他	日本人	生体	17(17.71)	47(48.96)	24(25.00)	8(8.33)	—	96
Grewe, et al.	米国人	抜去歯	561(78.79)	39(5.48)	35(4.92)	77(10.81)	—	712
Tastsas, et al.	ギリシャ人	抜去歯	436(88.08)	48(8.69)	12(2.42)	4(0.81)	—	495

表3-3: 歯頸部ほうろう突起の他人種との比較(上顎第3大臼歯頰面)

報告者	人種	材料	0	I	II	III	Ii	計
			n (%)	n (%)	n (%)	n (%)	n (%)	
恩田, 峯村	インド人	頭蓋骨	100(58.14)	48(27.91)	6(3.49)	18(10.47)	—	172
Grewe, et al.	米国人	抜去歯	1772(87.83)	92(4.54)	76(3.35)	88(4.34)	—	2028

II度の距離の差は第1では2倍強, 第2では1.5倍弱と増加する。第3大臼歯では歯頸線と歯槽縁間距離はIII度が最も大きく, 次いでI度, II度の順である。0度とIII度の距離の差は1.3倍と増加する。

すなわち, 歯頸部ほうろう突起は歯槽縁の吸収に影響を及ぼすことが分かった。

### 結 論

インド人上顎骨121例に植立した上顎大臼歯の歯頸部ほうろう突起を観察し, 次の結果を得た。

#### 1. 出現率

第1大臼歯はI度が44.2%で最も多く, 次いでIII度が5.4%, II度が2.5%である。

第2大臼歯はI度が28.9%で最も多く, 次いでIII度が22.7%, II度が7.9%である。下顎大臼歯中

最も高率にみられる。

第3大臼歯はI度が27.9%で最も多く, 次いでIII度が10.5%, II度が3.5%である。

#### 2. 歯頸線と歯槽縁間の距離

第1大臼歯は0度で平均2.7 mm, I度で平均3.6 mm, 最大11.5 mm, II度で平均5.8 mm, 最大9.5 mm, III度で平均4.3 mmである。

第2大臼歯は0度で平均2.4 mm, I度で平均2.9 mm, 最大7.5 mm, II度で平均3.3 mm, 最大6.5 mm, III度で平均3.1 mmである。

第3大臼歯は0度で平均2.0 mm, 最大7.5 mm, I度で平均2.5 mm, 最大5.5 mm, II度で平均2.5 mm, III度で平均2.8 mm, 最大4.5 mmである。

稿を終るに臨み, 御指導, 御校閲を賜った恩田千爾教授に深謝いたします。

## 文 献

- 1) 阿部善磨 (1975) 大白歯に出現するエナメル突起と歯周病との関連について. 日歯周誌, 17: 29—32.
- 2) 岩野清史, 清水 徹, 清水欽也, 太田隆温, 白髪 仁, 柴田達美, 松江一郎 (1975) 根分岐部病変とエナメルプロジェクション. 日大口腔科学, 1: 83—88.
- 3) 加治正禎 (1977) 上顎大白歯における Enamel Projection について. 九州歯会誌, 30: 1085—1092.
- 4) 上條雍彦 (1965) 口腔解剖学 1 巻骨学, 1 版, 341—346. アナトーム社, 東京.
- 5) 川崎考一, 五十嵐勝, 江面 晃, 森田和子, 永田良人, 林 秀樹 (1986) 歯髄と根分岐部の解剖学的構造. 歯科ジャーナル, 19: 675—693.
- 6) 川崎考一, 長谷川満男, 原 耕二, 小林幸男 (1976) 根分岐部にみられるエナメル突起: 発生頻度, 位置, 広がり, 根分岐病変との関係について, 日歯保誌, 19: 139—148.
- 7) Masters, D. H. and Hoskins, S. W. (1964) Projection of cervical enamel into molar furcation. J. Periodont. 36: 49—53.
- 8) 松江一郎, 石川一郎, 桐野忠昭, 塩入隆行, 荻野智子 (1982) エナメルプロジェクションについて. 日歯評論, (482): 41—50.
- 9) 村上守良, 水城和男, 加治正禎 (1964) 下顎臼歯の根分岐部における Enamel Projection について. 九州歯会誌, 22: 269—303.
- 10) 恩田千爾, 峯村隆一, 都築文男 (1983) 下顎大白歯の歯頸部ほうろう (エナメル) 突起. 松本歯学, 9: 196—203.
- 11) Pedersen, P. O. (1949) The East Greenland Eskimo dentition. 137—140. C. A. Reitzels Forlag. Copenhagen.